

高 齢 化 社 会 の 展 望

——スポーツ、趣味の継続と仕事の展望を通して——

昭 和 59 年 9 月

ポ ー ラ 文 化 研 究 所

仕事も趣味も

——老後はライフスタイルの多様化志向——

35才以上の人が老後にどのようなライフスタイルを展望しているのであろうか。現在の仕事と老後の仕事ということでライフスタイルを含めて選択してもらった結果が表－1の通りである。男女とも老後は働くことよりは趣味の生活が中心となり、のんびり余生を暮したいと思っている。一方、男性は仕事を、女性は外出行動を何才までしたいと思うかと聞くと表－2のようになる。これを見るとかなり高齢まで働くことを希望している。そうすると、表－1の趣味と余生のライフスタイルを選ぶ人の多さで一見矛盾するように見える。しかし、表－1のマルチアンサー比が現在より老後の方が大きくなることで判るように、現在より老後に多様な生き方をしようとしている。つまり仕事もし、のんびり趣味も楽しみたいということで矛盾しているわけではない。

ところで、この仕事と趣味の両立は可能であろうか。男性に比べて女性は専業主婦というライフスタイルもあり、現在でも趣味の生活を楽しんでいる人もいるように、両立の例を身近に持っている。しかし、男性の方は仕事一辺倒のライフスタイルから、自分自身を生かす世界を取戻そうと考えている様子がはっきり見える。これはライフスタイルの上では一大変化である。そして、一方でこのようなライフスタイルを経済的に維持するために仕事も続けたい、と思っているのが表－2の結果なのであろう。

このように、自分を生かす趣味やスポーツと、それを維持するための仕事を両立させ、選択幅の広い、適応力の大きさを必要とするライフスタイルを選ぶ時代に、それを支える財力、体力、順応力は、決して若い時ほど大きくない。かえって、欠落する部分が多くなり選択の幅が狭くなるともいえる(表－3)。そして高齢化するとともに、また、自分の世界を持つことによって、ますます関心領域が狭隘化し、その領域以外のことは記憶にとどまらなくなってしまうのが一般的であろう。これが、高齢化がより個性化に向かうといわれるところであり、ある意味での協調性が欠ける面がでて来るわけである。従って、高齢化した場合、仕事にしろ、研究にしろ、それが独立性を持つ方がよいし、趣味についてもひとり遊び的要素が増えるのではなかろうか。しかしそれだからこそ、その個人的世界とのコミュニケーション・パスを持つ必要もある。つまり、より似た仕事や研究をしている人、あるいは、より近い趣味の人との交流しやすいような方策やツールの必要性が生れてくるといえる。

1. 調査の趣旨

高齢化社会の到来が近づくにつれ、新聞その他マスコミの報道においても、「高齢化社会」の文字を見ない日はないくらいである。一般に、高齢化社会についての論調をみると、大半が悲観論に傾きがちで、そのイメージは、ぼけ老人や寝たきり老人の世話やゲートボールの世界である。それは、高齢化社会のマイナス面についての過大評価ではないだろうか。そこで、高齢者がもっとも積極的に興味を示す趣味活動や職業への展望を通して、従来とは異った側面へのアプローチを試みたのが、この調査である。

2. 調査の概要

調査地域……………東京及びその近郊

調査対象者……………35才以上の男女ペア460組

調査時期……………昭和59年5月

調査方法……………アンケート方式（留置法）

調査対象者の年齢分布と学歴分布

（上段：人）
（下段：%）

性別\年齢	35—39才	40—44才	45—49才	50—54才	55—59才	60—64才	65才以上	N.A.	合 計
男 性	128 (27.8)	114 (24.8)	77 (16.8)	55 (11.9)	34 (7.4)	19 (4.1)	22 (4.8)	11 (2.4)	460 (100.0)
女 性	188 (40.9)	120 (26.1)	58 (12.6)	38 (8.3)	22 (4.8)	13 (2.8)	13 (2.8)	8 (1.7)	460 (100.0)

性別\学歴	中 学 卒	高 校 卒	短 大 卒	大 学 卒	N.A.	合 計
男 性	38 (8.3)	147 (31.9)	39 (8.5)	224 (48.7)	12 (2.6)	460 (100.0)
女 性	45 (9.8)	251 (54.6)	102 (22.2)	58 (12.6)	4 (0.9)	460 (100.0)

3. お問合せ先

○ポーラ文化研究所

〈結果の要約〉

1. 仕事も趣味も

——老後はライフスタイル多様化志向——

35才以上の方は老後にどのようなライフスタイルを展望しているのでしょうか。結果は男女とも老後は働くことよりは趣味の生活が中心となり、のんびり余生を暮したいと思っているが、それはかなり高齢になってからのこと。それまでは仕事もし、のんびり趣味も楽しみたいと多様なライフスタイルを志向している。

2. 第1位・男性ゴルフ、女性ハイキング 第2位・ハイキング、水泳

——老後のスポーツ——

老後のスポーツとして望んでいるのは、男性の場合、ゴルフが圧倒的に多い。次に、ハイキング、水泳、ジョギングと続く。女性の場合はハイキング、水泳が比較的多く、テニスが3位である。

3. ギャンブルやめて、旅行と読書

——老後の趣味——

趣味活動はスポーツと異なって、高齢化はあまり障害とならず、継続率が高い。ただし、男性は女性に比べて、継続率が低く、特にギャンブルの継続率が低い。これは、現在ギャンブルを趣味としている人にも、何かうしろめたさがあるということであろう。男女ともに、趣味としたいものは旅行と読書が多い。

4. 経済力の低下と気力の喪失

——高齢化社会の展望と不安——

多くの人は、高齢化社会に不安を持っており、特に高齢時の趣味活動の障害としては、経済力の低下をあげる人が多い。経済を除くと、「気力がなくなる」ことをあげた人が圧倒的に多い。

5. 収入源は年金主体

——老後の収入展望と仕事観——

やはり高齢時の収入は年金が主体であり、特に年齢が高い層でこの傾向が強い。しかし、今後に向けては諸状況からみて、高齢者も働かざるをえない状況になるであろう。そこで、60才ごろから希望する仕事のタイプをみると、男性は、収入より自分の能力をいかした仕事をし、時間が自由になる仕事がいいと思っている。

6. おしゃれな人は好奇心が強い

——情報へのアプローチ——

「気力」のもとになるのは好奇心が強いことである。つまり、「自分はおしゃれをする方」、「若いグループに入るときは身だしなみに気をつける」人たちは、新しい商品が出ると、すぐに買ったり、調べたりする傾向が強い。又、スポーツや趣味活動をよくする人たちでもある。

7. 男性に強いられる状況の変化

——高齢時のライフスタイルにおける男女の差と特徴——

男性の高齢者ライフスタイルの展望の特徴は、やや燃え尽き症候群的である。つまり、健康に留意せず、働けるまで働いて、あとはその時になって考えるという気持ちが感じられる。そのために実際に高齢になった時、不器用な対応しかできないのではないか。その点、女性は男性に比べライフスタイルの変化は小さいので、高齢者のライフスタイルに軟着陸しやすいであろう。

表―1 現在及び老後の仕事・ライフスタイル

――主な項目のみ抽出――

主な職業、 ライフスタイル	男 性		主な職業、 ライフスタイル	女 性	
	現 在	老 後		現 在	老 後
自 営 業	8.5%	13.9%	自 営 業	5.7%	7.8%
自 由 業	5.4	10.4	内 職	7.6	2.2
会 社 営業・事務 技能職	40.7	15.9	専 業 主 婦	39.6	20.7
会 社 企画職	21.5	12.2	パ ー ト	12.6	10.2
会 社 管理職	31.5	12.4	フルタイム	4.3	2.4
奉 仕 活 動	2.8	9.3	奉 仕 活 動	5.7	15.0
趣 味 生 活	2.4	33.9	趣 味 生 活	12.4	42.0
のんびり 余生	0.9	29.1	のんびり 余生	2.4	23.3
マルチアンサー比率*	141 %	172 %	マルチアンサー比率*	126 %	160 %

*マルチアンサー比率―一人が平均いくつの職業、ライフスタイル種目を選んだかを示すもの。

表―2 何才まで仕事をしたいか(男性)、外出行動をしたいか(女性)

(%)

	―55才まで	―60才まで	―65才まで	―70才まで	―70才以上	N A
男 性	1.5	13.0	32.4	29.4	20.4	3.3
女 性	1.3	8.3	14.6	29.6	44.1	3.2

表―3 高齢化によってライフスタイルの選択幅に制限を与える状況の例

	項 目	状 況 の 変 化	欠けてくるもの
ライフ スタイル の 変 化	仕 事	慣れた組織、職業からの別離	ノウハウ
	仲 間	新しい仲間との別離、機会の減少	情 報
	スポーツ 趣 味	素養、蓄積のないものへの参入の難しさ	適 応 性
	家 族	子供の巣立ち、独立。家計負担額の減少	指 導 性
経 済 上	取 入	フロー財源としての収入の減少	消 費 力
	ファンド	ファンド・ストックは増えにくい	投 機 力
健 康 上	体 力	体力、感覚力の減少	体 力
	病 気	病気による行動制限	自 由 度

このことから、次のようなことが言えるのではないだろうか。

高齢化社会について、高齢者を年齢の横軸で結ぶ(高齢者は高齢者だけで活動する)ような従来の考え方は、マイナス面しか見えなくなり、その対策としての保護や保障が主題のテーマになる。そして、プラス面をさがしてもゲートボールくらいのイメージしか湧かなくなる。

実際は高齢化するほど、かたくなさを含めて個性化するので、仕事やライフスタイルも個人により多様化してくる。スポーツや趣味もそうである。従って、同じ種類の仕事や趣味のグループの中で活動するという年齢を縦軸に結ぶ方向の対策(老若が一緒に活動する)の方が、高齢者の蓄積したノウハウも生きるし、若い人とスクランブルすることによる活性化も期待でき、好ましい方向といえる。

第1位 男性ゴルフ、女性ハイキング 第2位 ハイキング、水泳

——老後のスポーツ——

自分が高齢化しても心身ともに老けこまない方法として、スポーツをすゝるとか体を動かすことを心掛けている人は多い（フリーアンサーから）。調査対象者の35才以上の熟年は、自分の老後のスポーツとしてどのようなものを望んでいるのであろうか。

表－4の調査結果をみると、男性の場合はゴルフが圧倒的に多い。次がハイキング、水泳、ジョギング、テニスが続く。

女性の場合は、ハイキング、水泳が比較的多く、テニスが3位である。その他、ダンス、スキー、ゴルフ、ジョギングが並んでいる。

これらをみると、高齢化するにあたってのスポーツ展望を分けると4つのグループに分かれる。

- I) 現在も多くの人が親しんでいるし、高齢になっても続けたいと思われる。あるいは、新たにしたいという人も多いもの。→ゴルフ、テニス
- II) 現在比較的多くの人が親しんでいるが、高齢化すると体力的に無理がありやめる人の率が高いもの。→野球、バレーボール、卓球、ボーリング、スキー
- III) 現在、ある程度の人が親しんでいて、高齢になって新しく参加する人が増えるもの。→ハイキング、ジョギング（男性）、ダンス、水泳（女性）
- IV) あまり変化のないもの。→水泳（男性）、武道

データとしては示さなかったが、この中でテニス、スキーは比較的年令の若い層に選ばれており、これらはゴルフと同様にスポーツ施設の増加によって、今後、高齢者の参加が増加していくのではないと思われる。

その意味で、水泳などもプールの増加によって人気が出て来ているように、マリンスポーツなども（ここでは絶対値が小さいので省略したが）、決して高齢者の参加をさまたげるものではないかもしれない。

むしろ、ゴルフは収入の高い人がより多くしている傾向があり、金のかかるスポーツということになれば、高齢になったとき、多くの人にとって実際には続けていくことが難しいのではないだろうか。

その点、ハイキング・登山は人気があるうえ、金も比較的にかからず参加し続けやすいと考えられる。また、溪流釣り、バードウォッチング、山菜狩りなど趣味的要素を加えていけば、面白い発展が期待できる。但し、人をひと所に集められないことや、消費する金額が少ないことから、ゴルフやテニスなどのようには企業的に手の出しにくいところであろう。しかし、高齢化社会の市場の典型とも考えられるので、いろいろなアプローチが試みられることであろう。

なお、ゲートボールは高齢者のみのスポーツというイメージがあるためか、高齢になってからといって選ぶ人はゴルフに比べて少ない。もっとも、施設が少ないという面もあるのかもしれないが……………。

表-4 高齢になっても続けたい、または始めたいスポーツ
(男性)

		(%)													
		ゴルフ	野 球	テニス	バレー ボール	卓 球	ボーリ ング	水 泳	マリン スポーツ	ジョギ ング	ハイキ ング	スキー・ スケート	アスレ チック	武 道	ゲート ボール
現在している人に比べて 老後どれくらいの人 がしたいと思うか		77.2	21.7	72.5	37.5	47.5	35.0	50.0	50.0	65.3	68.3	48.9	62.5	75.0	0.0
MA比	現在	17.2	12.4	8.2	1.4	7.5	7.5	8.7	1.4	8.3	7.7	8.4	1.4	1.3	0.0
	高齢	20.1	3.9	8.8	1.1	5.3	3.9	9.3	2.3	9.1	10.3	6.4	1.2	1.3	2.5

(女性)

		(%)										
		ゴルフ	テニス	バレー ボール	卓 球	ボーリ ング	水 泳	ジョギ ング	ハイキ ング	スキー・ スケート	スポーツ ダンス	ゲート ボール
現在している人に比べ て老後どれくらいの人 がしたいと思うか		60.0	75.6	28.6	33.3	41.2	63.6	55.9	69.8	59.0	61.0	0.0
MA比	現在	2.7	7.3	4.4	6.9	5.6	10.3	7.7	9.7	9.9	8.1	0.0
	高齢	7.2	9.2	1.6	4.9	4.5	12.6	6.9	12.7	7.2	7.6	2.3

MA比＝マルチアンサーの全てを100としたときの比率

ギャンブルやめて、旅行と読書

——老後の趣味——

趣味活動はスポーツと異なって、高齢化はあまり障害にならない。かえって時間があれば、より活発にできるはずである。また、趣味活動は、女性にとってはスポーツより親しまれ、より多彩な活動を楽しめるのではないだろうか（表－5）。

男性の場合、数では旅行、読書が1、2位になり、あとは園芸・盆栽、映画・観劇、釣り、囲碁・将棋、ドライブの5つが肩を並べている。

女性では、旅行と和洋裁・編物が肩を並べて多く、次に読書となる。4位が映画・観劇、5位が書道・陶芸、6位料理、7位茶道・華道となり、後は少ない。

現在している趣味で残りやすいのは、男性では書道・陶芸が一番で、次いで囲碁・将棋、3位が読書となる。女性では外国語が一番で、次が書道・陶芸、園芸・盆栽、読書、映画・観劇、旅行、和洋裁の7つが残りやすい。

表－5の男性と女性を比べると、男性は女性に比べて趣味の継続率が全体的に低い。男性のかなりの部分は仕事も少なくなり、趣味も少なくなると何を生きがいにするのであろうか。

このあたりに男性の燃え尽き症候群的傾向が伺え、さらに粗大ゴミ化するポテンシャルが高いように思われる。

特に、競馬・競輪、パチンコ、麻雀などのギャンブルの継続率はきわめて低い。これは高齢化した時だけでなく、現在熟年の人でさえ、今後続けるものとは思っていないのである（データ省略）。

ギャンブルについてのあるうしろめたさがこのようなデータになったのかもしれないが、ある意味での男性の内面の精神構造をみるような感じがする。

男女ともに継続率が高いものに書道、絵画、陶芸があるが、これらは続けることによってノウハウも蓄積され高齢がひとつの有利さを生むことにもなる。その意味で、ギャンブル性があまりない囲碁・将棋は男性でも継続率が高い。ギャンブルも続けていくことで枯れてきて、ギャンブル「道」にでもなれば、趣味のない生活よりはるかにまし、という見方ができないでもないが…。

表－5 高齢になっても続けたい、または始めたい趣味 (男性) (女性) (%)

	パチンコ	競馬 競輪	囲碁 将棋	麻雀	釣り	ドライブ	旅行	スポーツ 観戦	コーラス カラオケ	楽器 演奏	映画 観劇	園芸 盆栽	書道・絵画 陶芸	パソコン コン	写真 ビデオ	外国語	読書
現在している人に比べて 老後どれくらいの人 がしたいと思うか	35.3	27.0	82.6	52.0	77.1	60.6	76.9	61.9	68.2	54.5	77.5	74.2	94.4	40.9	67.7	51.6	80.6
MA比																	
現在	5.1	3.0	6.3	7.3	5.9	9.5	12.3	7.2	5.4	0.9	6.8	6.5	1.6	1.5	4.9	2.2	11.9
高齢	2.4	1.2	7.5	4.7	7.2	7.3	13.4	6.1	4.3	1.1	7.4	7.5	3.8	1.8	5.0	2.5	12.4

	和洋裁 編物	パチンコ 競馬	囲碁 将棋	茶道 華道	料理	ドライブ	旅行	ダンス 舞踊	コーラス カラオケ	楽器 演奏	映画 観劇	園芸 盆栽	書道・絵画 陶芸	パソコン センタ	外国語	読書
現在している人に比べて 老後どれくらいの人 がしたいと思うか	81.2	60.0	66.7	69.6	68.2	60.9	83.3	60.7	70.0	79.3	84.5	87.3	87.5	75.0	93.8	86.5
MA比																
現在	14.1	1.2	1.7	4.5	8.4	6.2	13.6	2.3	3.8	3.1	10.3	5.3	4.3	2.2	1.9	13.0
高齢	12.6	0.6	1.6	6.0	7.1	3.9	13.6	2.3	3.4	4.0	10.6	5.5	7.3	3.2	3.4	11.9

MA比＝マルチアンサーの全てを100としたときの比率

経済力の低下と気力の喪失

——高齢化社会の展望と不安——

多くの人は、高齢化社会に不安を持っており、特に高齢時に趣味活動する場合、何が障害になるかと聞くと経済力の低下が一番だという人が多い。(表—6—)

表—6— 高齢化社会への不安と高齢時の趣味活動の障害

(単位：%)

項 目	性別	全くその通り	ややその通り	どちらともいえない	やや違う	全く違う
高齢化社会に不安がある	男性	30.0	35.7	20.4	5.7	2.4
	女性	35.4	37.8	18.3	2.6	0.9
高齢時の趣味活動の障害は経済力	男性	28.5	26.7	23.9	11.1	3.7
	女性	28.9	28.9	21.5	12.0	4.6

この不安をもつ人は年齢に関係なく多い。比較的若い層は支えなければならない高齢者の層を思い、より高齢の人は、現実の経済力の低下や体力の低下を思うのであろう。

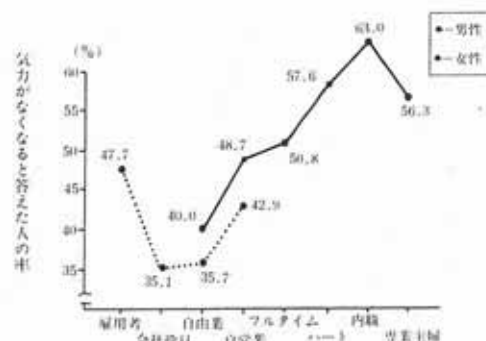
経済力の不安を除いて、高齢者になったとき何が趣味活動などするときに障害になるかという「気力がなくなる」ことを上げた人が圧倒的に多かった(表—7—)。

この気力の喪失は年齢・学歴・世帯収入に関係しない。唯一関係するのは仕事でありその差は著しい(図—8—)。

図からわかるように、男性では雇用者より役員が、自営業より自由業の方が気力のなくなることとを心配していない。女性では、自由業・自営業・フルタイム雇用者・パートタイム・内職の順に気力のなくなることとを心配する人がだんだん多くなる。これらの仕事を比べると、男性の場合、会社役員や自由業の人は仕事に対する自由裁量権があり、単純作業と違って仕事に変化がある。女性についても、前述の仕事の順(図8で右から左の順)により気力のある人が就く仕事という面と同時に、仕事種目としてもより自由裁量度や変化の大きさの順にもなっている。

表—7— 高齢時における障害——経済を除いて——

(単位：%)					
性別	体力の衰え	感覚の衰え	情報の不足	仲間がいらない	気力がなくなる
男性	9.4	4.6	14.4	17.2	42.6
女性	6.5	3.0	13.9	11.5	55.4



図—8— 高齢時の活動における障害は「気力がなくなること」

収入源は年金主体

——老後の収入展望と仕事観——

高齢になった時に、一番不安なのが経済力の低下ということであれば、その時、男性は収入源を何に求め、女性はどのようなライフスタイルに生きがいを求めるのであろうか(表—9)。

表—9 高齢時の収入源とライフスタイル

67,8才頃の収入源

男 性	仕 事	財産運用	年 金	子供依存	そ の 他	N. A.	TOTAL
()は%	139人 (30.2)	63 (13.7)	235 (51.1)	4 (0.9)	4 (0.9)	15 (3.2)	460 (100.0)

67,8才頃の日で一番大切なこと

女 性	のんびり	家族の世話	趣味活動	仕 事	そ の 他	N. A.	TOTAL
()は%	66人 (14.3)	103 (22.4)	235 (51.1)	40 (8.7)	6 (1.3)	10 (2.2)	460 (100.0)

やはり高齢時の収入は年金が主体である。特に年齢が高い層でこの傾向が強い(35～39才では年金約45%、仕事約40%に対し、55～59才では年金約60%、仕事約20%)。しかし、今後に向っては、生きがいを趣味などに求め、豊かなライフスタイルを希望するという内側からの要請と、高齢者の人口比率の拡大による若い層への年金負担率の限界という外側の条件からも、高齢者も働きに出ざるをえない状況になるであろう。

では、60才からはどのような仕事につきたいと考えているのであろうか。それは、表—10の通りである。

表—10 60才で選ぶライフスタイルのタイプ

60才ごろから希望する仕事のタイプ

男 性	安定的な収入	時間の自由	収入より能力を生かす	能力に見合う収入	経験より何より仕事	N. A.	TOTAL
()は%	69人 (15.0)	122 (26.5)	133 (28.9)	79 (17.2)	19 (4.1)	38 (8.3)	460 (100.0)

この結果を見ると、男性の場合は、収入より自分の能力を生かした仕事をし、時間が自由になる仕事がいいと思っている人が大半である。

高齢者になったら能力に見合う収入を得たいと収入に固執する人はあまり多くはない(17%)。

情報へのアプローチ

——おしゃれな人は好奇心が強い——

高齢時に経済力の低下を除き、一番不安を呼ぶのは「気力の喪失」なのだが、この「気力」のもとになるのは好奇心が強いことという結果を得た(表-11)。

表-11は相関行列の中からおしゃれに関する項目を抽出したものである。「自分はおしゃれをする方」と思う人や「若いグループに入るときは身だしなみに気をつける」人や「高齢になってもおしゃれを楽しみたい」人は、新しい商品に対してすぐに関心を買ったり、調べたりする傾向が強い。このようにおしゃれ志向の人は好奇心も旺盛である一面、流行や時代の流れにも動かされやすいともいえる。しかし、好奇心があることは若さを保つ上で意味のあることだと考えられる。このおしゃれ志向の人は年齢や学歴と関係なく、スポーツや趣味活動をよくする人に多い。

表-11 好奇心とおしゃれの相関

項目 \ 性別	男 性				女 性				男 性		女 性	
	ビタミンE	ビデオカメラ	新しい自動車	新製品	ビタミンE	海外旅行	新しい化粧品	服装の流行	スポーツ活動	趣味活動	スポーツ活動	趣味活動
おしゃれする	17	12	16	11	28	16	17	33	44	45	39	44
若いグループ	18	11	12	—	17	—	15	10	31	30	27	23
高齢おしゃれ	14	—	11	10	23	17	17	33	25	26	20	21

表中の数値は、相関係数の小数点3桁目を四捨五入し100倍したもの。

細 字：5%以下の危険率で相関関係があるといえる以上の数値。

太 字：1%以下の危険率で相関関係があるといえる以上の数値。

記入なし：相関関係が全くないか、5%以上の危険率でしか相関関係があるといえないもの。

男性に強いられる状況の変化

——高齢時ライフスタイルにおける男女の差と特徴——

高齢時における展望では、男女でかなりの差がある。調査結果及び一般的状況を含めてまとめると表-12のようになる。

表-12 高齢時のライフスタイルにおける変化の男女の差

性別 変化項目	男 性	女 性
仕 事	組織から別離で 変化大	子供の独立程度で 変化小
仲 間	急激に減少 情報格差大	変化少なく 情報格差小
スポーツ	体力の低下 体の不具合の発生 変化大	体力の低下 体の不具合の発生 40代で発生し 結果的に変化 は男性に比べ て小さい
趣 味	組織→個人のライフスタイルの変化 で継続性小	家族→個人のライフスタイルの変化 で継続性大
経 済	収入減→変化大 金のかかる趣味、遊びは継続性小	収入はもともと少なく 変化小 もともと金のかかる趣味なく 継続性大
健 康	短命→変化大	長命→変化小
意欲気力	個人差大	個人差小
環 境	通勤型から居住地域型→変化大	居住地域主体→変化小
配 偶 者	妻への依存度大	夫への依存度小

全体の結果を通し、またフリーアンサーの内容からも、多くの男性の高齢者ライフスタイルの展望の特徴は、やや燃え尽き症候群的である。つまり、健康管理に留意せず、高齢者ライフスタイルへの展望を無意識に避け、働けるまで働いてあとは余生をのんびりと過ごすのだ、あるいは、その時になって考えるのだという気持ちが感じられる。そのために、実際に高齢化が現実になった場合不器用な対応しかできないし、戸惑うケースが女性よりはるかに多く、気力をそがれることが多いのではないと思われる。

一方、多くの女性の場合、ライフスタイルの変化は男性に比べて小さいので、高齢者のライフスタイルに軟着陸しやすい。ただし、趣味の項のデータで見ると、一見実用性のあるものとかかわりを求めたり、教わることが好きなために勉強のための勉強的趣味に固執する傾向がある。フリーアンサーで外部とのかかわりをより求めようとしている人は、男性に比べて著しく多い。それはとりもなおさず実態は逆であることを示している。女性の社会進出は進んだとはいえ、行動、交際範囲の狭さから、趣味も結果的に自己完結的か、小数グループの枠を出ないで、社会への反響が小さく結果的に不満を持ったり落胆する結果になりやすい。

男女ともともこのような特徴的問題をかかえながら高齢化社会を迎えるのであろうが、社会全体として高齢化社会が安定化するまでいろいろ歪みが起きよう。そしてそれは、新しいマーケットの発生を促すと思われる。